

〔紹介〕

徳永光展著

『国際日本学の探究 夏目漱石・翻訳・日本語教育』

野坂 昭雄

本書は、一九九〇年三月に山口大学人文学部国文学科を卒業された徳永光展氏の、文学の翻訳や日本語教育など多岐にわたる論点を扱った諸論考がまとめられたものである。「国際日本学」とは、閉鎖的な印象のある（日本）に関する知を、他の国・地域との接触・交渉の相の下で活性化することを目指すものと言えようか。そのために著者は、自身の研究対象である夏目漱石と翻訳、日本語教育という主に三つの点から（日本）なるものを捉え直そうと試みている。

全体はⅠ～Ⅵ部に分かれている。「第Ⅰ部 翻訳者との対話」は、漱石の『心』を英訳したメレディス・マッキニー氏、『坑夫』を独訳したフランツ・ヒンターエーダー・エムデ氏へのインタビューである。エムデ氏が二〇二三年度まで山口大学人文学部で教鞭を執っておられたこともあり、紹介者はこの第Ⅰ部を非常に興味深く拝読した。例えばマッキニー氏との対話では、出版社≡編集者の意向が強く作用し、訳文が影響を受ける事情など、翻訳の裏側が明かされる。インタビューを読んでいると、翻訳は翻訳者の孤独な営為などでは決してなく、翻訳者自らの意図と出版社の意向との闘争とも思えてくる。著者は、微に入り細をうがって訳文を読み込んだ上で訳

者との対話を繰り広げること、その様相を見事に浮かび上がらせている。原文を尊重するか読者の理解を優先するか、といった翻訳の指向性ももちろん重要であろう。だが、細かに見ていけば、訳語から文の区切れの位置に到るまで、翻訳は種々さまざまな思想、言語的感覚、文化、そして経済性などが抗争する場でもある。このインタビューが冒頭に置かれている点には、翻訳が、著者のイメージする「国際日本学」の実践の場であるという認識がよく示されている。翻訳行為の内実を垣間見ることのできる貴重なインタビューである。

「第Ⅱ部 翻訳研究の諸相」は、翻訳を理論的に考察する「第Ⅰ章 翻訳研究の領域」と、ドイツにおける漱石および日本文学の翻訳状況を紹介した「第Ⅱ章 ドイツ語圏における夏目漱石」、そして二本の書評から成る。第Ⅰ章では、翻訳は「あらゆる分野にその営みが存在する」営為であり、「音楽・美術・映画といったさまざまな分野における解説・批評等もまた（非言語の言語化）」という意味では異領域間にまたがる翻訳である」にもかかわらず、そうした発想が特に日本人に希薄であることが指摘される。「メディアの発

展により文学という形式そのものが変容を迫られている今日、専門分野全体の地殻変動も文学から文化学へという形で求められている」と述べている通り、著者は現今の日本文学研究・教育に強い危機感を持っており、閉鎖性を乗り越えるためにこそ翻訳や比較文学の発想が重要となると考えている。日々教室で生徒・学生に向けて文学を教えている者には、実感をもって受け止められているであろう問い、避けて通ることのできない「何のために文学を学ぶのか」という問いに、著者は真摯に向き合っているのである。英語での授業、英語論文や海外での研究発表が業績として評価され、研究の国際的競争力が求められる昨今、日本文学の教育・研究が活路を見出すにはどうすればよいか。

著者のそうした危機意識に対して、「第三部 教育研究方向の展望」、「第五部 日本文学の研究と教育」では具体的に問題点が示され、改善法も提案されている。その根底にあるのは、やはり翻訳あるいは比較文学的な発想である。一口に「翻訳」といっても、問題は非常に複雑だ。通常は、翻訳は原書の刊行された国について理解するためにおこなわれる営みとのみ考えがちである。しかし、翻訳が映し出すのは、その書が自国で翻訳される必然性、言い換えれば政治的・文化的コンテクストに他ならない。他者との比較を通して自己を知るように、翻訳は自国の状況を照らす鏡でもある。それに加え、翻訳は外国語を自国語の中に移し入れる過程で、必然的に自国語を歪め、違和を生み出す。それは、ポジティブに捉えれば新しい自国語を生み出すことに繋がる。常に変化してやまない言語を活性化する方法として翻訳行為はある。そして、日本文学の教育・研究を翻訳的、比較文学的な場に置くために、著者は留学生の存在が

大切であると述べる。現在、主にアジアの国々から来日している留学生は、まさに〈日本語〉なるもの、〈日本文学〉なるものに違和をもたらし、文学研究を活性化する視座を提供してくれる貴重な存在であるに違いない。

このほか「第四部 ドイツ語圏の日本学」は、ドイツでの日本学の歴史や研究機関、蔵書などの情報を提供しており、「第六部 日本語教育の現場」は留学生への日本語指導について、著者自身の経験に基づいて詳しく論じられている。全体は四〇〇頁を越える非常に浩瀚な書であり、もちろんその内容を充分に紹介することなど不可能だが、日本文学研究者や翻訳者、日本語教育に携わる人など、多くの人に手に取ってもらいたいと感じる。示唆的な提言に富み、紹介者も自身の研究、教育のあり方について考えさせられる点が多かった。何よりも、アルファベットの索引と英文要旨が末尾に置かれていることが、著者の姿勢を端的に物語っている。

(春風社、二〇二三年二月刊、四一五頁、四、〇〇〇円＋税)

(のさか・あきお)